

先史スラヴ文化におけるエンバクの語彙的証拠

Lexical Evidence for Oats in Prehistoric Slavic Culture

佐藤 規祥

Noriyoshi Sato

Abstract

It is not clear when the cultivation of oats began in Slavic prehistory. Palaeobotanical evidence for the earliest cultivated oat (*Avena sativa*) found in the archaeological sites of Central Europe indicates that oats were grown at least in the Bronze Age.

The cognate lexicon for oats is found in Slavic and Baltic, reflecting the peculiar archaic sound correspondence, and also in Latin, in which the original form was enlarged by secondary suffix. This lexical isogloss is assumed to be dated back to the Bronze Age in 2nd millennium BC. It appears that oats were already available among Slavic and Italic ancestors in the Bronze Age, although the precise species cannot be determined. Therefore, the linguistic evidence is almost compatible with the dating of the palaeobotanical evidence of cultivated oats in Central Europe. Moreover, it is assumed that primarily wild oats were utilized as fodder or hay for domestic animals and afterward were cultivated also for human consumption as late as the early Iron Age.

1. 序説

ヨーロッパにおける新石器時代の幕開けはコムギやオオムギの計画的な栽培によってもたらされた。この農耕文化は西アジアから拡散したと考えられているが、その文化の担い手がどういった言語集団であったかについては特定できていない。少なくとも原インド・ヨーロッパ語族が今日のウクライナ南部やバルカン半島に出現し、ヨーロッパ各地に拡散したと想定される前 4000 年以前にはすでに農耕文化は定着していたと認められる。

そのインド・ヨーロッパ祖語にはコムギやオオムギを表したとされる複数の語彙の候補が想定される。すなわち、ヨーロッパ各地に拡散した当初からすでにインド・ヨーロッパ語族もまた、農耕を行っていたのは間違いなからう。その後、彼らの言語的統一性が失われ、各々の語派に分岐したのちに、それぞれの定住した土地の環境に適応して徐々に新たな栽培植物を育成していったにちがいない。この事実は新石器時代から鉄器時代以後に至るヨーロッパ各地の考古学上の遺跡において、様々な栽培植物が検出されていることを示す、考古学的あるいは古民族植物学的研究の成果から知ることができる (Zohary & Hopf; Wasylikowa et al.)。このような研

究の視点からは、時代ごとの各地の考古学的遺跡において個別の栽培植物がいつ頃から育成されたかを特定するうえで、貴重な情報をもたらす。しかしながら、考古学的に年代測定された検出例は、一切検出しない事例も含め、それが必ずしもすべてを語っているわけではないことは周知のとおりである。また、考古学的に定められた文化遺跡を特定の民族言語集団に関連付けて説明することは、多くの場合に議論を避けることができない。そればかりでなく、一部の栽培植物の場合には、意図的に栽培されていたか否かを結論付けることは難しいということも無視することができない。従って、ある特定の言語集団が概ねどの年代に個々の栽培植物を育成し始めたかについて議論するのは、その年代が深くなるにつれより一層困難になることは避けられない。

上述した通り、ヨーロッパ各地の文化遺跡において個々の栽培植物が出現した年代を特定するには、少なくとも考古学や古民族植物学の領域から得られる情報は欠かせない。しかしながら、実際に個別の民族またはその祖先がどういった農耕文化の歴史を経たかを論じるには、まず史的比較言語学的な視点からの議論に基づき考察することが要請される。これまでのところ古民族植物学の領域の対象としてだけでなく、歴史言語学的な検討対象としてもあまり十分に議論されて来なかった栽培植物のうちでも、穀類のエンバクの栽培の開始時期については、以下に述べるようにまだ不明な点が多く残されている。

今日では、エンバク属は一般にヨーロッパ北部を中心にその栽培地が広く分布している反面で、それが農耕文化における主要穀物のコムギやオオムギに次ぐ位置にライムギとともに定着したのは、比較的遅かったと考えられている (Zohary & Hopf 77; Hancock 197)。その理由には次の点が考えられる。まず、そもそもコムギやオオムギと比して何らかの理由で相対的にその検出例が少ないために、栽培開始の年代が相対的に遅くなる傾向があるということが指摘される。次に、遺物の種を特定できないエンバクが、栽培目的で出現したのか否かが定められないという点がある。これについては後で再び詳しく論じるが、エンバクには栽培種と野生種の異なる2種が見られることに根拠がある。その上、エンバクはしばしばオオムギの雑草として随伴するために、意図的な栽培によらなくても自然と拡散して、収穫したオオムギなどに混入した遺物として残される可能性が排除できない。さらに問題を複雑化する要因は、栽培を目的としていなかったにも関わらず、家畜に給餌するという二次的な利用目的がすでに定まっていたとすれば、オオムギなどの穀類と合わせた収穫が定着していた可能性が排除できないことである。すなわち、穀粒を備蓄食料として収穫するため意図的に計画的な栽培を行うことと、不特定の農地または休耕地に繁茂する多数の雑草とともに家畜の飼料に利用することでは、文化史的な意味が大きく異なるということである。

以上のように、遺跡内におけるエンバクの検出例自体が直接的に何を意味するのか、容易には判別しがたいという問題がある。従って、異なる環境下に分布する個々の民族文化ごとに、エンバクの栽培を文化的に受容した背景と時期は異なることが十分に考えられる。このような意味において、史的比較言語学的方法論に基づきエンバクを意味する語彙を語源的に考察

することは、先史時代の民族文化史を解明するのに一定範囲の貢献ができるにちがいない。

しかしながら、言語学的な視点からの考察は、しばしば祖語における語形と語義を定め、音韻形態変化を説明することに焦点が当てられ、一般に文化史的な背景の満足いく説明がなされない傾向が強い。そのために、とりわけ祖語におけるより厳密な語義の発達を説明することが課題として残されている。そこで、古民族植物学の領域から得られる事例を考慮の対象に取り入れたうえで、史的比較言語学の方法論に照らした問題の解明が求められる。本論においては、とくにスラヴ諸語ならびに関連するインド・ヨーロッパ諸語においてエンバクを意味する語彙の比較、対応に基づき、それらの祖語における語源学的起源を定め、さらに原スラヴ社会においてその栽培が開始された年代を相対的に位置付け、文化的に利用されてきた背景を考察することを目的としたい。

2. エンバクの対応語彙

スラヴ諸語において一般にエンバクを意味する語彙は、以下 (1) の通りである。

- (1) ロシア語 *обѣс*, *обсá*, 古期ロシア語 *обесѣ*, ベラルーシ語 *обѣс*, ウクライナ語 *обѣс*, *бісá*, ポーランド語 *owies*, *owsu*, 上ソルブ語 *wows*, 下ソルブ語 *wows*, チェコ語 *oves*, *ovsa*, スロヴァキア語 *ovos*, *ovsa*, スロヴェニア語 *óves*, *óvsa*, セルビア・クロアチア語 *òvas*, *óvsa*, マケドニア語 *obec*, ブルガリア語 *obéc* である。

例外的にブルガリア語方言で *Bromus secalinus* を指す例が報告されている (ЭССЯ 39, 234)

上記の諸語における対応語の比較に基づき、スラヴ祖語における **ovьsь* の祖形が再建される。その古風な拡張辞の子音 **-s* は母音 **-ь* (< **i*) に後続することから判断して、インド・ヨーロッパ祖語の **-k* が変化したものに間違いはない。なぜならば、スラヴ祖語の **s* は **i*, **u*, **r*, **k* に後続する場合に規則的に **-š* に変化するからである。従って、上記のスラヴ祖語の **ovьsь* はその最初期における **owiŋo-* という語形から発したことを裏付けている。

この語形はさらに次のバルト諸語の語形 (2) に対応する。

- (2) リトアニア語 *avižà* 「エンバク粒」, (複数) *āvižos* 「エンバク」 (< **awiŋh-*)。ラトヴィア語 *āuza*, (複数) *āuzas* 「同」。ただし、Fraenkel が比定した古プロシア語 *wyse*, *wisge* 「同」はリトアニア語の *avižà* ではなく、*vizgē* 「カニツリグサ (*Trisetum*)」に語形対応するので、むしろ後述する雑草型のエンバクを指した疑いがあり、語源上の関係は排除されよう (Fraenkel 1, 28; Derksen:75)。

しかしながら、上述の同じ拡張辞の子音の対応 (スラヴ諸語 *s* < **k*: リトアニア語 **ž* < **ŋh*) に特別な説明が求められる。すなわち、もしそれらが共通の語形から発したと仮定するならば、

スラヴ語派かバルト語派のいずれかが子音の例外的な音変化を被ったとしなければならない。もしくはそもそも異なる形態素によって拡張したと解釈するほかない。この問題については後の 7 節で改めて詳しく論じたい。

バルト諸語に対応する語形が音声面と文法性を示す形態で不一致する点を除くと、語幹が一致しているのに対して、次のラテン語 (3) の対応語彙は固有の異なる接尾辞で拡張している。

- (3) ラテン語 *avēna* 「カラスムギ?」 < **avesna* < **awiġh-sna* (Machek 423; Walde & Hofmann 81; Trautmann 21)。祖形 **awe-sna* の再建には修正が求められる (Fraenkel I, 28, Brückner 388)。

スラヴ諸語でエンバクを表す語彙がバルト諸語とラテン語に対応する同源の語形が現れるのに対して、ゲルマン諸語では全く異なる語彙が用いられる。このゲルマン諸語には古くから複数のエンバクを表す語彙が存在していた (Schrader 320; Markey 594)。すなわち、英語の *oat* と同源の語と、ドイツ語の *Hafer* と同源の語と、スウェーデン語及びノルウェー語の *hagre* ‘oats’ と、古期高地ドイツ語に検証される *evina* といういずれも互いに起源の異なる語彙である。これらのうち、まず英語の *oat* は古英語の *āte* 「雑草」が変化した語であり、インド・ヨーロッパ祖語における語根 **oid-* から発したと想定される。他方で、ドイツ語の *Hafer* (古期高地ドイツ語 *habaro*) はオランダ語 *haver* とスカンディナビア起源とされるイングランド北部方言 *haver* に同源語が現れる。これらの語はいずれもゲルマン祖語 **hab(e)r-* から発したと想定され、ラテン語の *caper* 「オスヤギ」 (< **kapro-*) に規則的に対応すると考えられる (Mallory & Adams 409)。ヤギの意味からエンバクを表す語彙が発達したのは、このゲルマン諸語に限られる。これは、ヤギの主要な飼料として当初からエンバクが利用されたと解釈されるが、Markey はこの説明には納得がいかないようである。次に、スカンディナビア諸語に現れる *hagre* からは祖語の **hagr-* が想定され、さらにケルト諸語でエンバクを表す語のアイランド語 *coirce*, ウェールズ語 *ceirch*, ブリトン語 *kerc’h* などに対応語を見出す (Kluge 224)。これらケルト諸語の語形は祖語の **korkryo-* から発達した古アイランド語 *coir* 「毛」と関係付け、鋭い芒の形態を表現したとして語義の発達を説明する。そこで、そこに想定される長く鋭い芒のエンバクを表現する原義から、ゲルマン祖語の **hagr-* とケルト諸語の語がサンドオート (*Avena strigosa*) を示したものと同定した (Markey 594-595)。

古期高地ドイツ語 *evina* は、ラテン語 *avēna* からの借用語であると考えられ、西ゲルマン諸語の方言にのみ現れる *haver*, *hafer* などと分布域が重なり合う。そこで、Markey は両者がエンバクの異なる種を示すものとみなし、北部に分布する *haver*, *hafer* は秋撒きの、南部に分布する *evina* は春撒きのエンバクに該当させた (Markey 594)。さらに後者の古期高地ドイツ語 *evina* をもたらしたラテン語 *avēna* とその同源語は、短い芒の種 *Avena brevis* (和名なし) を示したという (Markey 595)。

上記のように、一般にエンバクを表す語彙の区別を単に語源学的に説明するだけでなく、植

物理学上のエンバク属の分類に照らし合わせ、それらが本来示していた語彙の区別が種の識別を反映していると解釈したのであった。語彙の区別は単にその外見上の相違を表すのが目的ではなく、それぞれの用途や処置法が異なるという実用的意味があったと考えられる。確かに彼の主張に間違いがなければ、ゲルマン諸語においてエンバクを表す語彙の区別が反映している背景には、栽培に適したエンバクの種の選択が想定されるかもしれない。もし、そうだとすれば、ラテン語の *avēna* と関係付けられるスラヴ諸語とバルト諸語の語彙もまた同様に、*Avena brevis* を表したことになる。ところが、一方のラテン語 *avēna* が具体的にどの種を表したかは今のところ必ずしも定かでなく、他方のスラヴ諸語ではほとんどの場合に栽培種の *Avena sativa* 「普通エンバク (common oat)」を意味する。この問題の解明には、植物学的な分類に基づく裏付けが不可欠である。しかしながら、ヨーロッパにおけるエンバク属の栽培化の過程は、これまでのところ古植物学的な証拠事例が比較的少なく解明の途上である。そこで、次にその植物学的な視点から解明されている一般的な事実について概観したい。

3. 植物学的分類

ヨーロッパにおいてエンバク属はコムギやオオムギなどと並び主要な穀類として栽培されてきたけれども、エンバクが栽培化に至るのは後者と比してはるかに遅かったと考えられる (ラディジンスキー 226; Hancock 197; Wasylukowa et al.; Zohary & Hopf 77)。というのは意図的に栽培されてきたコムギと異なり、エンバクがコムギやオオムギの栽培地に随伴する一般的な雑草であったために、その擬態化が進行した結果、二次的作物として進化したと通常説明される (ラディジンスキー 226; Zohary & Hopf 77)。ここでまず重要なのは、古植物学的な視点からヨーロッパにおけるエンバクの栽培化が開始した年代を検討することである。そのうえで、語源論的にエンバクを意味する語彙が発生した相対的年代を推定することが求められる。これによって、語彙の発生年代がその栽培化の過程のどの段階に位置付けられ、そこから何が推論できるか検討したい。

そこでまず、エンバクの形態学的種の分類について概略的に触れておく必要がある。エンバク属 *Avena* には2つの栽培種、すなわち二倍体のサンドオート (*Avena strigosa*) と六倍体の普通エンバク (*A. sativa*) がある。このサンドオートは *A. strigosa*, *A. nuda*, *A. brevis*, *A. hispanica* の4種に分けられる。サンドオートの祖先野生種 (*A. wiestii*, *A. hirtula* など) は中央アジアからイスラエル、トルコ、ギリシア、イタリアの地中海沿岸、イベリア半島とアルジェリア、モロッコの大西洋岸にかけて分布する (ラディジンスキー 226; Zeven & de Wet 110; 森川 201; Hancock 197)。サンドオートは西ヨーロッパの一部で飼料作物として栽培される (Zohary & Hopf 73)。

一般に普通エンバクの祖先野生種には、六倍体で野生型のオニカラスムギ (*A. sterilis*) と、同じく六倍体で雑草型のカラスムギ (*A. fatua*) が知られている。オニカラスムギはザグロス山脈から近東、ヨーロッパと北アフリカの地中海沿岸域、モロッコの大西洋岸、ポルトガルに見ら

れる(Zohary & Hopf 74; Zeven & de Wet 110)。オニカラスムギは地中海域全般で耕作放棄地に侵害し、コムギやオオムギ、果樹園、路傍の有害雑草になる (Zohary & Hopf 76)。カラスムギは中央ヨーロッパと西ヨーロッパの寒冷で内陸的な気候に分布し、一次生育環境に育つことは非常に稀で、穀類圃場やその周縁部などに限られる(Zohary & Hopf 76)。

ラディジンスキーによれば、栽培エンバクが雑草型のカラスムギから進化したという考えには否定的である (ラディジンスキー 227; Zeven & de Wet 109)。カラスムギの拡散はエンバクの栽培化後に生じたとする方が上手く説明されるという (Zeven & Wet 110)。同様に、森川もまたカラスムギは寒冷地における人工環境によく適応した雑草型であるのに対し、オニカラスムギは上記の通り温暖な地中海沿岸域の野生型であり、普通エンバクの一次的多様性中心地に必ず分布することから、栽培型のエンバクはオニカラスムギにおける脱粒性と休眠性を喪失して進化したと見なしている (森川 203-204)。また、カラスムギは一般にコムギやオオムギに随伴する有害な雑草であったため、パンや粥に混じりこみ、その味や色に不具合を発生させていた (Gregg 84)。Gregg は考古学的立場から、カラスムギがコムギやオオムギに随伴する雑草であることから、すでに新石器時代には他の同様の雑草とともに拡散したと想定している。

上記の事実に基づくと、原スラヴ人の源郷地は地中海から遠く離れた内陸に分布していたと想定されることから、オニカラスムギは彼らにとって未知であったに違いない。これに対し、中央ヨーロッパの寒冷地に植生したカラスムギは、早くから既知の雑草であったことが想定される。もしこれらの事実間違いがなければ、原スラヴ人はオニカラスムギの栽培化の過程を知ることなく、普通エンバクの栽培を開始したことになる。そこで、普通エンバクを栽培する以前からすでにコムギやオオムギに随伴する雑草のカラスムギを識別し、それを利用する術があったのか否かが問われよう。仮に夥しい種類の雑草が選別、除去されないまま、家畜の飼料に利用されたのであれば、そこにカラスムギを識別する必要性はなかったに違いない。その意味でカラスムギを表す語彙が発達した段階において、その識別と利用方法が確立されていたことを裏付けることになる。従って、普通エンバクとカラスムギを意味する語とが発生した年代を相対的に推定することによって、その経緯をいくらかでも明らかにすることができるに違いない。このカラスムギを意味する語彙の起源については再び 6 節で論じたい。

4. 古民族植物学の証拠

考古植物学の調査報告に基づき Wasylikowa は新石器時代から中世にわたる時代ごとに、ポーランド、旧チェコスロヴァキア、ハンガリー、ルーマニア、ウクライナその他旧ソ連内のコーカサス諸国などに分布する考古学的遺跡において、エンバクの遺物が確認された地点の数を示した。本論考で関連のある地域毎に最古の出現例をみたい。まずハンガリーにおいては *A. sativa* が鉄器時代のハルシュタット (ラ・テーヌ 4) 期に出現する。ボヘミアではハルシュタット初期に作物として独立した *A. sativa* の栽培が最初に出現したという。他方、スロヴァキアでは鉄器時代のラ・テーヌ初期まで栽培種が出現しなかったことを示す。さらに北方のポーランド

ドでは、前 5000 年期の新石器時代の遺跡 (3 地点の Linear Pottery 文化, 3 地点の Lengyel 文化) において、*Avena* 属の少数の圧痕と芒の碎片が報告されている。その後、前 4000 年期後半の TRB (Funnel Beaker) 文化の遺跡においては、*Avena* の花粉が検出された遺跡が 1 例ある他には現れない。ただし、これらの証拠が栽培種か野生種かを特定するには至っていない (Wasylikowa 224)。その Linear Pottery 文化ではエンマーコムギや一粒コムギなどの栽培が多いのとは対照的に、TRB 文化ではオオムギの栽培が顕著であった。さらに 2000 年期後期の青銅器時代のラウジッツ文化遺跡では *Avena* の検出例が微増する (Wasylikowa 227)。他方で *Bromus secalinus* (和名なし) もまた新石器時代と青銅器時代の遺跡で頻出する一般的な雑草であり、穀粒に混入したまま収穫、消費されたい (Wasylikowa 225, 227)。さらに東方のウクライナでは、不確定種の *Avena* が穀類に混合した状態でトリポリエ文化初期から発見され続けているが、栽培種の穀粒が大量に発見されるのは後 2-4 世紀になってからである (同 231)。

なお、ドイツにおいては青銅器時代初期の複数の遺跡で栽培種エンバクの発見が近年になって報告され、同中期のアーンフィールド (Urnfield) 文化遺跡では栽培種とならび、野生種の *A. fatua* と *A. sterilis* の検出例も報告されている。これらの例と他の証拠から普通エンバクの栽培化は、北ドイツかその近隣の地域で青銅器時代から鉄器時代の移行期に発生したと推測されている (Stika & Heiss 362)。

ヨーロッパ中部、北部と対照的に近東や地中海域では、雑草の *A. sterilis* が広域に分布するにもかかわらず、新石器時代あるいは青銅器時代の遺跡において栽培種エンバクは発見されていない (Hancock 196, Fig.; Zohary & Hopf 77)。従って、この事実もまた普通エンバクの栽培化がヨーロッパ北部か中部で発生したことを裏付ける。

5. エンバクの利用方法

以上で論じたように、エンバクはコムギやオオムギに随伴する雑草に過ぎなかったものが、青銅器時代か遅くとも鉄器時代初期には作物としての小規模な栽培が開始されたと推測される。本格的栽培が進まなかった原因は不明であるが、栽培するまでもなく常に穀類に随伴する雑草として一定量が確保できたことが背景にあるのかもしれない。従って、これは雑草としての利用方法が確立されていたと仮定するならば、それを意味する語彙が発生したことの根拠にもなりえる。そこで次に、歴史時代において栽培種であるか否かを問わず、エンバクがどのように各地で利用されていたか、史料中の記録に基づき考察したい。

はじめに最古の記録として、古代ローマ時代の作品中の抜粋を数例 (4~7) のみ示す。当時は *avēna* が栽培種の食糧のエンバクでもカラスムギでもなく、馬の飼料かまたはコムギに害をもたらし雑草のオニカラスムギを指したと考えるのが妥当である (Hancock 195; Mallory & Adams 409)。なぜならば、前述した通り、地中海域ではカラスムギは生育せず、野生型のオニカラスムギが生育するからである。この点でとりわけコルメラの記載 (7) には関心がひかれる。というのは、オニカラスムギが単に家畜の飼料用に利用されただけでなく、その乾草を刈り取るため

牧草地に播種されていた事実を証しているからである。もしそうでなければ、秋に播種するということは、コムギなどの収穫後の休閑地を活用して、栽培を開始した経緯があったことを裏付けている。すなわち、計画的で意図的な栽培の発端が人の食糧用ではなく、休閑地を活用した家畜の飼料用であったことが推論されえる。

(4) ウェルギリウス (Vergilius) 『牧歌 (Eclogae)』 5 歌 36-37)

grandia saepe quibus mandavimus hordea sulcis, infelix lolium et steriles nascuntur avenae;

「しばしば成熟した大麦を播いた畝に、不作を呼ぶドク麦や実の乏しいオニカラスムギが育つ」

(5) プリニウス (Plinius) 『博物誌 (Naturalis historia)』 18 巻 44 章 149 節

Primum omnium frumenti vitium avena est.

「穀類に生じるあらゆる害の筆頭がオニカラスムギである。」

(6) カトー (Cato) 『農耕論 (De agricultura)』 37 章

Frumenta face bis sarias runcesque avenamque destringas.

「穀類は二度鋤を入れ、除草し、オニカラスムギを引き抜くとよい。」

(7) コルメラ (Columella) 『農耕論 (De re rustica)』 2 巻 10 章 32 節

Similis ratio avenae est, quae autumnno sata partim caeditur in faenum vel pabulum dum adhuc viret, partim semini custoditur.

「同じ手法はオニカラスムギに用いられる。これを秋に播き、一部はまだ緑のうちに乾草か飼料にするために刈り取り、一部は播種用に保管する。」

次に、中世のロシアで記録された代表的史料である『原初年代記ラヴレンチ本 (Повесть временных лет по лаврентьевской летописи 1377г.)』(8) と『家庭訓 (Домострой)』(9,10) からの実例を抜粋する (Лихачев; Орлов)。前者は飢えに耐えきれない時に命じて集めさせた食糧として、エンバクを取り上げた事例である。後者 (9) からの抜粋はビールに醸造するために用いられた事例である。これはロシアに限らず、ヨーロッパ各地で様々な穀類からビールが醸造されていた事実と違わない。また、57 章 (10) の抜粋例はとくに農耕馬の混合飼料用にエンバクが推奨されたことを示す事例である。

(8) 『原初年代記』 л.44, 6505 (997) 年

И рече имъ: «Сберѣте аче и по горсти овса, или пшеницѣ, ли отрубъ».

「すると彼らに「ひとすくいずつでもエンバクか小麦かふすまを集めよ」と言った。」

(9) 『家庭訓』 47 章

а коли пиво затирают ячменное или овсяное или оржанное или хмель парить ...

「大麦かエンバクかライ麦のビールを醸すか、またはホップを添加する時には」

(10) 『家庭訓』 57 章

и тѣмъ страдные лошади кормити или чем подмѣшиваючи невѣиницы или овсяной муки или сѣно рѣзаное или чевъ иного ...

「そして、それを農耕馬に食わすか、それにもみ殻付きの穀粒かエンバク粉か刻んだ乾草か何か別のものを添加し混ぜて食わす」

次に 17 世紀にチェコ語で著された図画付き対訳教材『世界図絵 (Orbis sensualium pictus)』76 章の本文から抜粋する。ここでもエンバクは馬の混合飼料に利用されたことがうかがわれる。

(11) コメニウス『世界図絵』76 章

Potom podřtyra flamu Owes (Obrok) opala opalkau který myřla z řěčkau a wybira z obročnjce a tjm krmi Koňa gako y Senem.

「その後でわらを敷いたら、エンバク(餌)を箕で簸り、切りわらと混ぜ、穀物倉から取り出し、乾草と同様にそれを馬に食わす

一方で、エンバクは実際に食用にされることが決して例外的ではない。以下の例 (12) はセルビア・クロアチア語辞典 (Banovac razg. 226: RHSJ 483) に掲載された抜粋例で、エンバクがパン加工用になる事例である。

(12) Čini se kruh od ječma, prosa, raži, opsa.

「パンは (中略) 大麦、キビ、ライ麦、エンバクから作る」

中世においてエンバクが広く栽培されていたのは間違いないが、実際には当時ですらその検出例が少ない。例えば、Кириянов が考古学的発掘調査に基づき報告したように、13 世紀に至っても北西ロシアのラドガ湖周縁やイリメニ湖水域では、エンバクの栽培が広まっていなかったことを証している。だが、これはエンバクが二粒コムギ (エンマーコムギ: *Triticum dicoccum*) に随伴する雑草であったことによると説明する (Кириянов 314, 323)。中世においても青銅器時代と同じく、他の穀類と比してエンバクの検出例が少ない事実は、それが穀類に随伴する雑草という性格を有するからだけでなく、穀粒で備蓄せずに脱粒性のエンバクを牧草地で刈り取る乾草や飼料用に消費されていたと考えれば説明可能かもしれない。

6. カラスムギの対応語彙

カラスムギと並んで注視すべき雑草としてカラスノチャヒキ (またはライグラス: *Bromus secalinus*) がある。この越冬性の一年生の雑草もまた、新石器時代初期の遺跡において高頻度で現れると報告される (Gregg 87, 91)。一粒コムギや二粒コムギ (エンマーコムギ) の穀粒と同等大の擬態を呈するために選別が難しい。このために青銅器時代のドイツの遺跡で粥状の食品に入れられたことを示す証拠が報告されている (Stika & Heiss 355; Gregg 91)。他方で畑の周縁部に植生する越冬性のアレチノチャヒキ (*Bromus sterilis*) の若草は家畜の飼料になりえる (Gregg 91)。

これらの雑草に注視すべき理由は、それがカラスムギを意味する語彙によっても表されるからである。このスズメノチャヒキ (*Bromus*) 属を意味する語がブルガリア語では овсига で表される。他方で、チェコ語とスロヴァキア語に対応する語 ovsíha は通常、カラスムギ (*A. fatua*) を意味する (Bartoš 273)。また、スロヴェニア語の ovsíga は「エンドウに混入したエンバク」を意味する (Pleteršnik 1, 878; Bezljaj 2, 263)。つまり、これはエンドウの雑草のカラスムギを指すと思われる。他方で、これらとは異なる接尾辞を伴う語形で東スラヴ諸語においても同様に、*A. fatua* (ウクライナ語 вівсюга, ベラルーシ語 овсюг) かまたは *B. secalinus* (ロシア語 овсюг) を意味する (ЭССЯ 39, 234)。

上記の南・西スラヴ諸語と東スラヴ諸語の語形からは、それぞれスラヴ祖語 *ovъsiga, *ovъs'uga, *ovъs'ugъ が再建される。いずれの語形も栽培種のエンバクを意味したスラヴ祖語 *ovъsъ から二次的に派生したことは明白である。そこで、接尾辞 *-iga による派生語の編年に焦点が当てられる。Вендина はロシア語方言において接尾辞 -ига を有する語の例を網羅し、意味論的に分類した (Вендина 236-251)。彼女によると、この接尾辞 -ига は -ика と交替する例もみられるという。Меркулова もまた同様の考察をし、中でも植物名を意味する語には以下の例 (13) などがあり、いずれも双方の語形が同義である (Меркулова 206-208)。

- (13) бруснига, брусника 「コケモモ」 (СРНГ 3, 207), ежевика : ежевика 「クロイチゴ」 (*sparganium ramosum* СРНГ 8, 326), клубнига, клубника 「シロバナヘビイチゴ」 (СРНГ 13, 310), землянига, земляника 「オランダイチゴ」 (СРНГ 11, 257)。

他方で、同様の交替形が現れない дерига (*Lappula echinata*) のような例もある (СРНГ 8, 24)。実際に、スラヴ祖語 *ovъsika, *ovъsikъ から発したと考えられる語はスラヴ諸語に現れるが、そのうち *A. fatua* を意味するのは、ウクライナ語方言の вівсика とセルビア・クロアチア語の方言形の òvsik, ovsika (*Bromus arvensis*, *B. secalinus*, *A. fatua*, *A. hirsuta*), ovsika (*A. fatua*, *A. hirsuta*, *B. Arvensis*) に限られる (ЭССЯ 39, 231; RHSJ)。チェコ語の ovsík は *Arrhenatherum* を意味し、他のスラヴ諸語では語義が多様に発達しているため、祖語の原義は容易に定められない。リトアニ

ア語 *avižuōlē*「オオカニツリ」(*Arrhenatherum elatius*: LKŽ 532) もまたエンバクを意味する *aviža* からの派生語である。オオカニツリは有用な牧草として知られる。この事実に基づくと、**ovъsika*, **ovъsikъ* は一般に家畜用の牧草に利用され、穀類の上記の不特定の雑草を意味しえたと考えられる。

ここでラテン語 *avēna* の祖型 **awiġ-sna* もまた、二次的に派生した **ovъs-iga* や *aviž-uōlē* と同様に、エンバクを意味したが消失した語形 **awiġ-* に接尾辞 **-sna* で拡張した派生語であろうと想定される。中央ヨーロッパで栽培される食用の普通エンバクは地中海域では見られないため、それを指す語彙は失われたに違いない。他方で古代ローマ時代の記録に残るように、飼料用に利用される野生型のオニカラスムギを表現する語彙が必要で保持されたと解釈される。

上記の通り、スラヴ祖語において通常なら同義の指小形として機能する接尾辞 **-ika* の語形は、祖語のはるかに遅い時代に **ovъs-* から派生したと想定され、**-iga* との交替形ではない。ウクライナ語で *A. fatua* を意味する *вівсика* は、スロヴァキア語などに現れる接尾辞 **-iga* を伴う語形から二次的に類推変化したものと考えられる。なぜならば、生産性の高い新しい接尾辞 **-ika* から二次的に古風な接尾辞 **-iga* を伴う語形に変化したという解釈は、説得力が弱く排除されるからである(Sławski 66)。実際、夥しい数の接尾辞 **-ika* を持つ語があるにもかかわらず、そのうち **-iga* の異形態と交替する例は上記の通り僅かではない。

さらに、**ovъs-* からの接尾辞 **-iga* による派生は語義を区別する機能を果たし、前者とは同義にならない。従って、**ovъs-iga* の接尾辞は上記の *бруснига* などの接尾辞とは異なる機能を果たし、起源も異なるであろう。スラヴ諸語以外にはこれと同じ機能の接尾辞を持つ同源語は確認されないことから、スラヴ祖語内で独自に発達したことは間違いない。さらに、**ovъsъ* より遅れて発生した古風な語であると想定される。つまり、栽培種エンバクを意味する語が発生した年代から多少遅れた年代に雑草のカラスムギを意味する語が発生したと想定される。ここでカラスノチャヒキを意味する語を編年するのは、論旨から逸脱するので検討を避けたい。

7. スラヴ語派における子音推移を示す語彙

Georg Holzer の説によると、スラヴ諸語とバルト諸語においては通常とは異なる子音推移を示す語彙が観察される(Kortlandt)。すなわち、インド・ヨーロッパ祖語の無声閉鎖音 (**p*, **t*, **k* など) が有声音 (**b*, **d*, **g*) で現れ、同じく有声帯気音 (**bʰ*, **dʰ*, **gʰ* など) が無声音 (**p*, **t*, **k*) で現れるという現象である。Kortlandt の評するところでは、この現象は未知の基層言語からの借用語と解釈される。その解釈の真偽はともかく、40 語を超える豊富な実例は、それが単なる散発的な事例ではなく、確かに子音推移の法則に基づき発した結果であることを明示している。ここではその 2 例 (14, 15) のみを次に示す (Kortlandt 73)。

(14) チェコ語 *brázda*「鋤跡」< スラヴ祖語 **borzda* < **borġda* < **porġ-ta-*, ラテン語 *porca*「畝」。

(15) チェコ語 *proso*「キビ」< スラヴ祖語 **proso* < **bʰrso-*, ラテン語 *far*, *farris*「スペルトコ

ムギ」< *b^hrs- (これと並行し子音推移を示さない語がある: セルビア・クロアチア語 brašno 「小麦粉」< *boršyno < *b^hors-ino-)。

当該説の子音推移は、リトアニア語 avižà 「エンバク粒」 (< *awiġ^h-) との比較に基づき、スラヴ祖語の овъсь (< *awik- < *awiġ^h-) にも作用したことが確認できる。他方で、南スラヴ諸語の方言では、この子音推移を示さない語形 (16) が観察されている (ЭССЯ 39, 237, Hill 213)。

別の観点からの説明によってもその子音が *ġ^h から発したことを示している。すなわち、E. Hamp の説に基づくなら、インド・ヨーロッパ祖語の *ġ に先行する母音はスラヴ祖語では長母音化されるが、*ġ^h に先行する母音は短母音が保持されるからである (Hamp)。

(16) セルビア・クロアチア語 оваз, マケドニア語 (Gomo Kalenik) oves, ovezo «oats» 。

同時にこの語形は Бернштейн が指摘したように、南スラヴ諸語 (中でもブルガリア語、マケドニア語) とバルト諸語との間に現れる独特な等語線を想起させる点でも興味深い (Бернштейн 73-75)。

当該の子音推移はゲルマン諸語には現れず、バルト諸語にも散発的にしか現れない。さらに、その子音推移を示す語彙は少なからず、ラテン語との間で等語線を示すことがある。一般的には、ラテン語がケルト諸語とゲルマン諸語との間で顕著な等語線を示すことから、原イタリア人の源郷地が前 2,000 年期の青銅器時代にはアルプス以北にあったと想定する説が有力である (Mallory & Adams 316-318)。もしそれが事実だとすれば、スラヴ祖語とイタリア祖語との間に現れる等語線もまた、原イタリア人が前 2,000 年期末にアルプス以北の源郷地から南下する以前に、それらの語彙が生じたことを暗示する。従って、問題の子音推移を示す語彙は、遅くとも前 2,000 年期末までの青銅器時代に発生したと推論される。しかしながら、その変化自体がどれほど後まで持続したかを定める手掛かりがない。その点では、この編年に十分な説得力が得られるには更なる正確な証拠の積み重ねが求められねばならない。

8. 結論

エンバクはコムギやオオムギに随伴する数多くの雑草の一つであった。この雑草を本来は二次的に家畜の飼料として利用し、当初は他の雑草との選別が行われなかったはずである。けれども、古代ローマ時代の記述から確認できるように、時を経て穀類の収穫後の休閑地に播種し牧草としての活用が定着したであろう。このように繰り返す播種により脱粒性を喪失した栽培種のエンバクは、食糧としての利用価値を獲得したと推論される。ここで問題なのは、他の多くの雑草のうちエンバクが選択された状況である。これは今後の課題の一つになりえる。

これまでに発見された普通エンバク *A. sativa* の古植物学的証拠が示す限りでは、その最古の推定年代が早いところでドイツにおける青銅器時代にあたり、東部のチェコ、スロヴァキア、

ハンガリーなどでは鉄器時代初期にあたる。すなわち、遅くても前 2000 年期末には栽培が開始したと考えられる。他方で、言語学的な証拠に基づき、ラテン語とスラヴ諸語におけるエンバクを意味する語彙の等語線の相対的な年代を推定すると、遅くても青銅器時代末までに形成されたことを示す。けれども、事実上の栽培化が開始してから栽培種が拡散するまでには、相当長い年数がかかったのは間違いない。他方、異なる語派の祖語間に数多くの語彙が共有されるまでもに数世紀間かかったに違いない。これらの事実には決定的な矛盾が見つからないことを考慮に入ると、エンバクの栽培は前 2000 年期の比較的早く青銅器時代に開始したという想定が成り立ちえる。また、飼料用に利用するための *A. fatua* を意味する語彙は、鉄器時代初期になって、スラヴ祖語内でエンバクと識別する目的で二次的に形成されたのであろう。雑草の *A. fatua* 自体ははるか以前から生育していたに違いないが、栽培種の *A. sativa* に食糧としての利用価値が定着するまでは、両者を選別する必要はなく、語彙面にもその区別は現れなかったと思われる。

それにもかかわらず、この問題の解明には植物学的な視座に立つ実証的な証拠の集積が欠かせない。栽培種の 6 倍体の普通エンバクにはその祖先野生種の 4 倍体の種が未発見である。そればかりか、その栽培化が進行した地域も定まっていない。他方で、青銅器時代以後の各文化領域において、栽培化が拡散した経緯もほとんど不明である。これらの課題の解明に向けては、言語学的な証拠の提示は全く期待できそうにない。それ故に、関連部門の今後の進展を俟つよりほかない。

注

- 1) エンバク (*Avena*) はしばしば英語の *oat* の訳語としてオート麦が当てられることがあるが、本論においては分類学上の区別を明確化する必要があるため、総称してエンバクとする。なお、他にもカラスムギの訳語も当てられることがあるが、これは分類学上の *Avena fatua* を指す場合にのみ用いる。

参考文献

- Bartoš, František 1905: *Dialektický slovník moravský*, část 1, Praha.
- Bezljaj, France 1982: *Etimološki slovar slovenskega jezika*, 2 knj. Ljubljana, Slovenska Akademija Znanosti in Umetnosti.
- Brückner, Aleksander 1974: *Słownik etymologiczny języka polskiego*. Warszawa, Wiedza Powszechna.
- Cato, Marcus Porcius. 1967: *On agriculture* (De agri cultura). Cambridge, Harvard University Press.
- Columella, Lucius Junus Moderatus. 1968: *On agriculture* (De re rustica). Cambridge, Harvard University Press.

- Comenius, Johann Amos 1979: *Orbis sensualium pictus*. Praha, Státní pedagogické nakladatelství. (邦訳: J. A. コメニウス『世界図絵』(井ノ口淳三訳)平凡社 1995 年)
- Derksen, Rick 2015: *Etymological Dictionary of the Baltic Inherited Lexicon*. Leiden, Brill.
- Fraenkel, Ernst 1962-1965: *Litauisches etymologisches Wörterbuch*. 1-2. Heidelberg, Carl Winter; Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht.
- Gregg, Susan Alling 1988: *Foragers and farmers*. Chicago, University of Chicago.
- Hamp, P. Erik 1989: Balto-Slavic noun suffixes in -g-. *Rocznik Sławistyczny*, 46/1, 3-5.
- Hancock, James F. 1992: *Plant evolution and the origin of crop species*. Englewood Cliffs, Prentice Hall.
- Hill, Peter 1991: *The Dialect of Gorno Kalenik*. Columbus, Slavica.
- Jungmann, Josef 1990: Jan Petr (ed.) *Slovník česko-německý*, díl 1-5. Praha, Academia.
- Kluge, Friedrich 1934: *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. Berlin, Walter de Gruyter.
- Kortlandt, Frederik 2020: An Indo-European substratum in Slavic? In: Frederik Kortlandt. *Studies in Germanic, Indo-European and Indo-Uralic*. Amsterdam. New York, Rodopi. 73-80.
- LKŽ 1968: *Lietuvių kalbos žodynas*, 1. Vilnius, Minties.
- Machek, Václav 1971: *Etymologický slovník jazyka českého*. Praha, Academia.
- Mallory & Adams: Mallory, J. P. and D. Q. Adams 1997: *Encyclopedia of Indo-European culture*. London, Fitzroy Dearborn Publishers.
- Markey, T. L. 1989: The spread of agriculture in western Europe. Indo-European and (non-)pre-Indo-European linguistic evidence. In: (eds.) David R. Harris and Gordon C. Hillman. *Foraging and Farming. The evolution of plant exploitation*. London, Unwin Hyman. 585-606.
- Pleteršnik, Maks 1974: *Slovensko-nemški slovar*. 1-2. (Reprint of the 1894-1895 ed. published by Knezoškofijstvo). Ljubljana, Cankarjeva založba.
- Pliny (Plinius secundus) 1971: *Natural history*, with an English translation in ten volumes. Vol.10. Cambridge, Harvard University Press.
- RHSJ 1926: *Rječnik hrvatskoga ili srpskoga jezika*. 9 dijel. Zagreb.
- Schrader, Otto 1901: *Reallexikon der indogermanischen Altertumskunde*. Strassburg, K. J. Trübner.
- Sławski, Franciszek (ed.) 1974: *Słownik prasłowiański*, t.1. Wrocław, Warszawa, Kraków, Gdańsk, Wydawnictwo Polskiej Akademii Nauk.
- Stika & Heiss: Stika Hans-Peter and Andreas G.Heiss 2012: Plant cultivation in the Bronze age. In :Harry Fokkens and Anthony Harding (eds.), *The Oxford Handbook of the European Bronze Age*. Oxford, Oxford University Press. 348-369.
- Trautmann, Reinhold 1970: *Baltisch-Slavisches Wörterbuch*. Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht.
- Virgil (Vergilius, Publius Maro). 1978: *Eclogue; Georgics; Aeneid*, with an English translation by H. Rushton Fairclough. Cambridge, Harvard University Press.

- Walde & Hofmann: Walde, Alois and J. B. Hofmann 1982: *Lateinisches etymologisches Wörterbuch*, Bd.1-2. Heidelberg, Carl Winter.
- Wasylikowa et al.: Wasylikowa, Krystyna, Marin Carciumaru, Eva Hajnolová, Borbála P.Hartyányi, Galina A.Pashkevich and Zoya V.Yanushevich.: East-Central Europe. In: Van Zeist, Krystyna Wasylikowa and Karl-Ernst Behre (eds.) *Progress in Old World Palaeoethnobotany*. Rotterdam, A. A. Balkema. 207-239.
- Zeven & de Wet: Zeven, A. C. and J. M. J. de Wet 1982: *Dictionary of cultivated plants and their regions of diversity. Excluding most ornamentals, forest trees and lower plants*. Wageningen, Centre for Agricultural Publishing and Documentation.
- Zohary & Hopf: Zohary, Daniel and Maria Hopf 1988: *Domestication of plants in the Old World*. Oxford, Clarendon Press.
- Бернштейн, Самуил Борисович 1961: *Очерк сравнительной грамматики славянских языков*. Москва, Издательство АН СССР.
- Вендина, Т. И. 1980: Суффиксы с г-основой (из русского диалектного словообразования). В кн.: *Общеславянский лингвистический атлас. Материалы и исследования 1978*). 236-266.
- Гринченко, Борис Д. 1958-59: *Словарь украинского языка*, т.1-4. Киев.
- Катон, Марк Порций 1950: *Земледелие* (перевод и комментарии М.Е.Сергеенко). Москва, Наука.
- Кирьянов, А. В. 1959: История земледелия Новгородской земли X-XV вв. В кн.: *Труды Новгородской археологической экспедиции*, том 2. Материалы и исследования по археологии СССР, No.65. Москва, Академия Наук СССР. 306-362.
- Лихачев, Д. С. (подготовка текста, перевод, статьи и комментарии)1999: *Повесть временных лет по лаврентьевской летописи 1377г*. Санкт-Петербург, Наука.
- Меркулова, В. А. 1967: *Очерки по русской народной номенклатуре растений. Травы, Грибы Ягоды*. Москва, Наука.
- Орлов, А. 1967: *Домострой по коншинскому списку и подобным*. The Hague, Europe Printing. (邦訳: 『ロシアの家庭訓(ドモストロイ)』(佐藤靖彦訳)新読書社 1984 年).
- СРНГ: *Словарь русских народных говоров*, т.3(1968), 8(1972), 11(1976), 13(1977). Ленинград, Наука.
- СРЯ: *Словарь русского языка XI-XVII вв.*, вып.12, 1987.
- ЭССЯ 2014: *Этимологический словарь славянских языков*, т.39. Москва, Наука.
- ラディジンスキー (Ladizinsky, Gideon) 2000: (藤巻宏訳)『栽培植物の進化: 自然と人間がつくる生物多様性』農山漁村文化協会.
- 森川 利信 2010: 「エンバクの来た道」 佐藤洋一郎, 加藤鎌司編著 『麦の自然史: 人と自然が育んだムギ農耕』 北海道大学出版会 197-220.